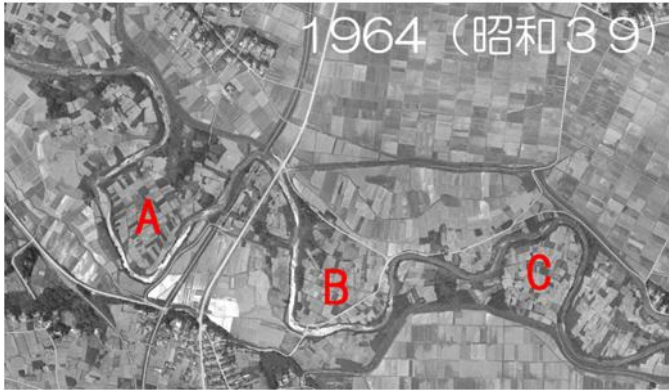


「都幾川の三日月湖(7)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

1964年(昭和39年)にはABCのすべての蛇行が「手つかず」の状態だった都幾川の流れ。その後、10年目の1974年(昭和49年)に、異変が現れる。



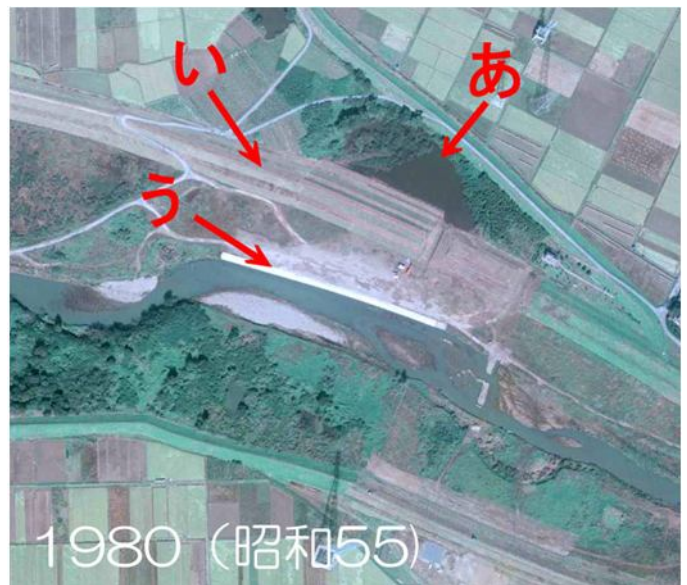
最初に人間の手が入られたのは、一番下流のCの蛇行部である。素人考えでは、上流の蛇行部を解消して、直線の捷水路(しょうすいろ)を造ったほうが、良さそうな気がする。しかし都幾川の河川事業では、下流側の屈曲部から河川修復を実施している。上流の屈曲部を先に直線化してしまうと、上流側から流下能力が上昇してしまい、その分、下流側の屈曲部に負担がかかるからであろう。この考え方は、石狩川の河川事業でも、同じような例が見られる。



上図は1974年(昭和49年)の蛇行Cの航空写真である。屈曲部は本流から切り離され、三日月湖になっている。自然にできた三日月湖のようにも見えるが、Cの部分を拡大して見ると、そうではないとわかる。



これがC部分の三日月湖を拡大したものだ。→に工事用車両(ダンプカーや重機)が多数写っている。明らかに人工的に流路を変更した「動かぬ証拠」と言える。私がこの写真を見て感じたことは、川の大きさに比べて、まあ、ダンプカーなんて、なんと小さいことだろう、ということだ。人間はもっと小さいわけで、こいつらが、川の流れを変えてしまうのだから、考えてみればものすごいことである。地球上で、川の流れを変えられる生物は、ヒトとビーバーだけである。



1980年(昭和55年)になっても、まだ工事は続いている。三日月湖は縮小し、「半月湖」(あ)になっている。立派な堤防(い)もほぼ完成。(う)には「まっすぐ流れろ!」と、強固な護岸らしきものも見える。